

スポーツボランティア・フリートークフェスタ その1  
2004年2月22日(日) 仙台市市民活動サポートセンター  
10時10分 ~ 11時10分

## 基調講演(速報)

木村 元彦 氏 (ジャーナリスト・ノンフィクションライター)

テーマ「サッカーボランティアからスポーツボランティアへ 広がる活動の今後」

### 1 ヨーロッパの事例

イルハンインタビューより・トルコとドイツ

神戸入団のイルハンは宮城スタジアムでもプレー

- ・ドイツ生まれのトルコ人...代表の3割にのぼる、このことがトルコサッカーをレベルアップしている

<1960年以来、旧西ドイツでトルコ人雇用が活発化 移民奨励、イルハンは「二世」トルコサッカーは強化政策として在外(特にドイツの)トルコ人に目をつける>

ドルトムント、ケルンでスカウティング この活動自体がボランティア

必ずしもサッカーの専門家ではなくとも、祖国の発展のために有志が募る

<400万人(クロアチアの人口に同じ)の在ドイツトルコ人から情報を集めスカウティングし、彼らが主体的に立ち上がって活動したことが、W杯3位につながった。>

- ・アウグスブルク(ドイツ3部)でキャリアスタート

アウグスブルクのスカウティングにはサポーターの情報が欠かせない

ボランティア的発想

これにより100キロ先の街に居た14歳のイルハンをスカウト。

施設充実、日曜も一部ピッチ開放。

イルハンの記憶は皆に焼きついている。

自発的なスカウティング活動あってこそ、選手への思い出も強い

イスラムの食生活に配慮するなど、外国人を受け入れるドイツ人の寛大な受け入れを感じる。自然に入り込む異文化。「違い」を認め合う発想。

余談：ルチェスク(ルーマニア人)はトルコで監督していたときにラマダンを理解するよう努力。試合前日に融通を利かせる。

- ・ドイツでの歴史観

歴史ワークショップ(学校と違う歴史学習)

自発的な聞き書きによる歴史編纂 「自分たちの歴史」ととらえ、史実の蓄積を再検証 俯瞰的な歴史観ではなく、自分の手の届く身近な歴史間を育てる

歴史を知るといふより、自分を知るといふ発想 文化・歴史への慈しみをボランティアの視点で



## ユーゴスラビア

レッドスター（ズベズダ）の古参サポーター・ミレ爺さん

第二次大戦中ナチスに抵抗運動、家族を失う。

その後レッドスターのサポートに人生をささげる。

これにクラブが応える。クラブが特別パスで観戦優待、国の体制が変わっても支援  
サポーターとクラブの双方向的な関わりがある。

ピクシー引退時に、グランパスサポーターが「ミレ爺さん基金」で引退試合に招待

これもボランティア活動。お爺さん自身が喜んだ セルビアメディアでも紹介。

双方にとって有益。

## イングランド

映画「フル・モンティ」

シェフィールドのうだつが上がらない労働者が「男だけのストリップ」を企画話

「オフサイドトラップ」の一言で、会わなかった振り付けが合うシーン 生活への密着  
を示す例

## クロアチア

代表合宿は国内（特にザグレブ）で行う、取材規制はなく解放的（日本は）

代表選手のストレッチに参加させる 思い入れ、裾野を広げる、選手側からのボランテ  
ィア

## まとめ

フロントの批判よりも、「自分たちが何をできるか」という発想が大事  
サポーターからの積極的な働きかけが重要

## 2 日本の事例・ワールドカップで感じたこと

日本のクラブは何か「引っ張られる」ことが多いのが問題。

グランパスの例：選手を練習後にトヨタの工場見学に連れて行く（2年前）

< 誰のほうを向いた経営？スポンサーにいい顔をする？ >

トリニータの例：行政主導、W杯のために平松知事（当時）の強制主導

行政主導ながら、税金は使っていない。

支援企業の課長クラスを後援会に加入「させる」 政治献金に等しい。

大分でW杯を開くにはこうするしかなかった 今後は民意との関わりが大事。どうなるか。

大分の関係者は去年の最終戦に関して

「アウェーなら負けていた。仙台だから復元できると感じられる。うちはそう考えると危ないので、報道で説いていかなければならない」

木村さんは仙台に興味特にぶつかりながら進めていくところ

< 行政や民間、いろいろな立場の方がこういう場で集まってくること >

W杯は、世界に対する大きなプレゼンテーションになった。結果として2002年以降は以前よりマッチメイクをしやすくなった

日本でキャンプや試合をしたチームはいい印象を受け、「また行ってみたい」という気になった。その要因は儀礼付けでない、融通の利いたおもてなしをした ボランティアの尽力がいい印象を与えた、努力が実った

< 変化に対して >

加藤久「宮城県人が、あそこまで盛り上がるとは」

ドゥバイツ「今も戻ってきたい」お見送りにはサポーターが来た、双方向の愛情

ピクシーの場合の名古屋ではちょっと距離があった？

市原・オシム監督

東京オリンピックでの歓待（選手村で選手に自転車を貸すなど）に歓迎。帰国後親日家にアベランジェ元会長

広島での水泳大会での歓待に歓迎。広島に原爆を落としたアメリカを憎むほど。W杯日本開催支持。

したがって今回のW杯のボランティアの精神が30、40年後に大きな実を結ぶ。

日本のホスピタリティは積極的なコミュニケーションがあり、多文化・多様な価値観を受け入れたことが特徴であった。

## まとめ

ボランティア活動の広がり、自分に戻ってくることであり、自分自身がかかわること

ドイツやスウェーデンでは「自然享受権」の考えが浸透

< モラルの範囲内で、自然の土地を享有できる権利 >

スポーツの権利も享有されるべきではないか？

「楽しむ」という発想から始まり、全ての人の共有を考える。これがボランティアの発想とつながる

日本には日本の運動のあり方が存在（運動会など） - その中で共有を考えることも必要  
< 仙台から発信したボランティア活動が、今後大きな形で帰ってきますように。 >



ポスターセッション

